

令和 5 年 5 月 16 日現在

機関番号：11101

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2019～2022

課題番号：19K00755

研究課題名（和文）自己調整学習に基づいた自律的英語学習モデルの構築

研究課題名（英文）Constructing an English Autonomous-Learning Model Based on Self-Regulated Learning

研究代表者

立田 夏子（Tatsuta, Natsuko）

弘前大学・教育推進機構・准教授

研究者番号：50364831

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 1,600,000円

研究成果の概要（和文）： 様々な分野におけるグローバル化が急速に進んでいる現代日本社会において、英語教育の一層の充実とグローバル社会で大いに活躍できる日本人の育成が、日本における極めて重要な課題となっている。本研究は、大学英語教育におけるCAN-DOリスト活用の諸過程を、自己調整学習の観点から理論的に検証することにより、日本人英語学習者が英語学習における自律学習を促進させるための要因を解明し、Readingに関する「自律的英語学習モデル」を構築した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究は、世界的な競争力をつけるための大学英語教育には必要不可欠な要素であるCAN-DOリストの作成・活用・評価という循環的な活用サイクルに着目した。本研究により構築された自律的英語学習モデルは、言語学習者が教育機関から社会に出てからも、様々な言語・文化に触れ、新しい言語を継続して自律的に学習し、異文化理解を深めようとする生涯学習としての言語学習につながる資質育成のために有効活用されることが期待される。

研究成果の概要（英文）： In modern Japanese society, where globalization in various fields has been rapidly progressing, it has become crucial in Japan to further improve English language education and to develop Japanese who can play an active role in the global society. This study theoretically examined the processes of using CAN-DO lists in university English education from the perspective of self-regulated learning to clarify the factors that promote self-regulated learning by Japanese learners of English, and constructed an “English Autonomous-Learning Model” for Reading.

研究分野：外国語教育関連

キーワード：外国語学習 日本人英語学習者 自己調整学習 自律学習 CAN-DOリスト

1. 研究開始当初の背景

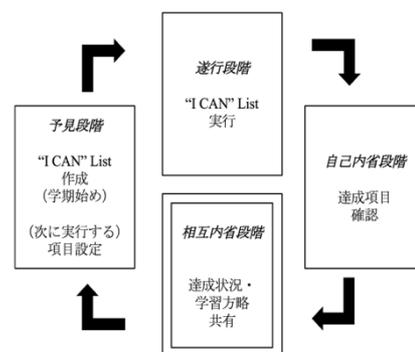
CAN-DO リストの言語政策への応用例として、「ヨーロッパ言語共通参照枠 (Common European Framework of Reference: CEFR)」(Council of Europe, 2001) が挙げられる。CEFR において、学習者は 6 レベルに分類され、言語運用能力が、言語を使って何ができるかという具体的な項目を「I can ...」という肯定的な表現で示した CAN-DO ディスクリプタによって規定される。文部科学省の提言では、中・高等学校の学習到達目標を CAN-DO リストで具体的に設定することが奨励されている。この CAN-DO リストは、グローバル化が進む現代社会において、世界的な競争力をつけるための大学英語教育に必要な不可欠な要素であるため、日本の大学において CAN-DO リストを活用している実施例も増え、CAN-DO リストの大学英語教育への応用がさらに進むことが期待されている。大学における CAN-DO リストは、シラバスの学習到達目標のみならず、自律学習における学習目標としても活用可能である。

学習目標を達成するための学習者の能動的な一連の学習プロセスを検証する一手段として「自己調整学習」が挙げられる。自己調整学習モデルでは、循環的な 3 段階 (予見段階・遂行段階・自己内省段階) が提唱され (Zimmerman & Moylan, 2009)、学習者が、動機づけ・学習方略・メタ認知の 3 要素において自分自身の学習過程に能動的に関与し、循環的な学習サイクルが成立することによって自己調整学習が達成されると考えられる

(伊藤, 2009)。日本人大学生を対象とした自己調整学習に関する研究により、自己調整学習方略の内容 (藤田, 2010)、自己調整学習方略の質 (瀬尾・植阪・市川, 2008)、動機づけの種類 (伊藤・神藤, 2003) など、諸段階における自己調整学習方略や動機づけの有効性が示されている。しかしながら、諸段階が循環的な学習サイクルとして成立するための要因の特性、特にその英語学習に関する研究は限られている。

本研究の計画を進めていく上で、予備的研究として、学習者自身で CAN-DO リストを作成し、その達成度を自己評価する「I CAN」List 活用を、自己調整学習の観点から改善した。改善点は、自己内省段階の次に「相互内省段階」を設定し (図 1)、毎授業の開始直後約 5 分間を利用して、「I CAN」List の達成状況と達成するために行った学習方略を 4~6 名で報告し合う、いわば「共有活動」を追加した点である。

図 1
自己調整学習における 4 段階



2. 研究の目的

本研究の目的は、大学英語教育における CAN-DO リスト活用の諸過程を、自己調整学習の観点から理論的に検証することにより、日本人英語学習者が英語学習における自律学習を促進させるための要因を解明し、「自律的英語学習モデル」を構築することである。本研究では、英語学習において、諸段階が循環的な学習サイクルとして成立するための要因の特性に関する研究を行い、グローバル社会の中で成功の鍵の一つである、「英語学習における自律学習を継続的に促進させるための要因の特性は何か」という問いに対する答えを解明する。

3. 研究の方法

本研究では、基礎研究と応用研究の完成を計画した (図 2)。

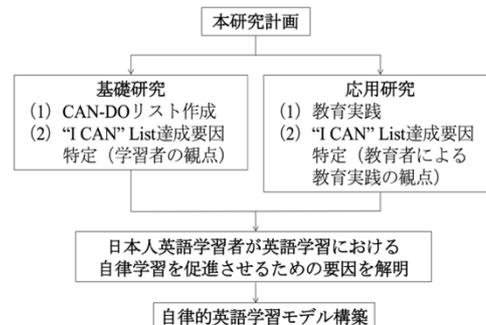
図 2
本研究の計画

基礎研究

(1) CAN-DO リスト作成: 担当する教養英語クラスを対象に、「I CAN」List を活用した教育活動を継続的に行う。学期末にデータ (「I CAN」List のディスクリプタ) を収集し、英語習熟度と 4 技能 (Listening/Reading/Speaking/Writing) 別に、系統的な CAN-DO リストを作成する。(2) 「I CAN」List 達成要因特定 (学習者の観点): 学期末にリフレクション活動を実施する。自己調整学習の 4 段階において学習者が CAN-DO リスト実行・達成のために考慮・実行した内容明らかにする。

応用研究

(1) 教育実践: 基礎研究にて作成した CAN-DO リストの中から学習者自身に 10 個のディスクリプタを選択させ、引き続き教育活動を行う。教育活動は、基礎研究 (2) を基に、予見段階から遂行段階にかけてのプロセスを中心に行う。(2) 「I CAN」List 達成要因特定 (教育者による教育実践の観点): 学期末にリフレクション活動を実施する。ディスクリプタの作成率・達成率を基に自律学習に利用可能な CAN-DO リストを策定し、応用研究 (1) による教育実践の有効性を検証する。



2020年度から2022年度は、COVID-19の影響でメディア授業と対面授業が不定期に行われ、一貫して対面授業であった2019年度と同一の条件下で基礎研究を続行することが不可能となり、本研究に遅れが生じた。2020年度と2021年度の基礎研究において、学習者は基礎研究(1)の4技能のうち、COVID-19の影響を受けずに1人で自宅でも学習ができるReadingに関する“I CAN” Listを作成する傾向があること、つまり、Readingに関する自律学習を好むことが明らかになった。そのため、上記研究方法を修正し、本研究で構築する「自律的英語学習モデル」をReadingに関するモデルに限定することとした。また、応用研究(1)ではReadingに関する5個からなる“I CAN” Listを学習者自身に作成させた。

修正した研究方法により、データを分析した対象者は、1年次必修科目である前期開講科目「Reading」履修者(日本人英語学習者である1年次生)、2019年度63名(中級)、2020年度46名(初級)、2021年度83名(初級)、2022年度67名(初級)、合計259名である。

4. 研究成果

4. 1. 基礎研究

2019年度から2021年度の前期第1回に、前期末までに達成したい目標を「I can ...」の「...」の部分学習者自ら10文作成することにより、学習者それぞれが目標を持って英語学習に取り組む準備をした(図2「予見段階」)。学習者は、「I CAN」 List作成の際は、授業シラバスと自分の英語能力に相当する、もしくはその少し上のレベルであろうCEFR(A1~A3)のReadingに関するディスクリプタを参考にし、「何を(Text)」「どの具合の頻度・程度で(Condition)」「どうする(Task)」を書くことが求められた。そして、そのうちできるようになったと自己評価できる“I CAN” Listを随時チェックすることにより、自分が作成した“I CAN” Listをどれだけ達成できたか、そして、自分が今後成し遂げたい英語活動は何かについて確認した(図2「自己内省段階」)。本研究でのTaskは、CEFRのReadingに倣い、「understand/read」とした。Conditionは、学習者自身で頻度(everyday/twice or three times a week/once a week)・程度(about 75%/100%)から選択した。授業第2回からは、自己調整学習の4段階に基づいて教育活動を行った。

前期末(第15回)にリフレクション活動を実施した。内容は、作成した“I CAN” Listとその達成率、そして、自己調整学習の4段階においてCAN-DOリスト実行・達成のために考慮・実行した内容(自由記述、複数回答可)であった。作成率(10文×192名=1920文中の頻出度)の高かった上位10のTextとそのTextを用いたディスクリプタの達成率を表1に、自己調整学習の4段階において学習者がCAN-DOリスト実行・達成のために考慮・実行した内容とその回答率を表2に示す。

表1

作成率が高かった上位10のTextとその達成率(2019年度~2021年度)

Text	作成率 (%)	達成率 (%)
1 Books for Extensive Reading ¹	85.12	93.12
2 SNS (e.g. Instagram/Twitter/Facebook/YouTube)	83.11	97.23
3 Instructions of package or tag (e.g. food, clothes)	75.43	93.33
4 Books (except Extensive Reading)	74.12	89.22
5 Textbook used in class	66.24	87.12
6 English papers related to my field of expertise	63.22	23.76
7 English games	62.65	60.23
8 Online Newspaper	61.12	22.11
9 Description of Apps	42.11	65.22
10 Newspaper	40.21	12.13

注) ¹ 授業でExtensive Readingに関する活動を実施することがシラバスに記載されている。

表2

自己調整学習の4段階において学習者がCAN-DOリスト実行・達成のために考慮・実行した内容とその回答率

段階	考慮・実行した内容	回答率 (%)
予見	・ 少し頑張れば達成できそうなリストにする	89.11
	・ 楽しそうなリストにする	88.43
	・ これまで挑戦したことがないディスクリプタを入れてみる	72.23
	・ 目的(例:就職にTOEIC Testのスコアが必要だから)に合わせる	45.13
	・ 周りの人と相談して作成する	32.12
	・ その他	8.20
遂行	・ 隙間時間を利用する、時間を管理する	88.33
	・ リストを常に意識する(毎日目標を確認する・目立つところに貼る等)	83.11
	・ リストを家族や友達に宣言する	69.32

	・ 達成できそうなディスクリプタから手をつける	65.23
	・ その他	8.32
自己内省	・ 達成できたら家族や友達に報告する	43.86
	・ 達成できたらすぐチェックを入れる	41.82
	・ その他	9.11
相互内省	・ 同じようなディスクリプタを作成した学生（学習者）同士で様々な学習方法話す	93.22
	・ 同じようなディスクリプタを作成した学生のうち、既に達成した学生からアドバイスをもらって、その中から自分にも合う学習方法を探す	91.12
	・ 学生同士で励まし合う	90.33
	・ 異なるディスクリプタを作成した学生の学習方法を聞いて次のリストを考える	52.11
	・ 達成できないディスクリプタに修正を加える	32.11
	・ その他	6.43

4. 2. 応用研究

2022年度の前期第1回に、学習者は、基礎研究にて作成したCAN-DOリストのTextの中から5つのTextを選択し、それにCondition（頻度：everyday/twice or three times a week/once a week・程度：about 75%/100%）とTask（understand/read）を選択して組み合わせることで、Readingに関する5個からなる“I CAN” Listを作成した。

授業では、自己調整学習の4段階に基づいて引き続き教育活動を行った。CAN-DOリストに関する教育実践は、基礎研究（2）を基に、予見段階から遂行段階にかけてのプロセスを中心に行った。具体的には、a. 第1回にて基礎研究（2）の結果を「学生の声」として提示した、b. 達成率が一番高いText「Books for Extensive Reading」（表1）を授業内・外活動に取り入れた、c. 作成率が9位だが達成率は6位のText「Description of Apps」（表1）を学習者にボランティアでMicrosoft Teams（メディア授業にて大学で活用したアプリ）の投稿機能を活用して紹介してもらった、d. 第2回から第14回まで継続的にグループ内で達成状況・学習方略などを共有する活動（図1「相互内省段階」）を設定した、e. その際、グループ内だけでなく、クラスで共有する活動も取り入れた、の5項目であった。

前期末（第15回）にリフレクション活動を実施した。内容は、作成したReadingに関する“I CAN” Listとその達成率、そして、教育実践への学習者による主観的有効性であった。作成率（10文×67名=670文中の頻出度）の高かった上位10のTextとそのTextを用いたディスクリプタの達成率を表3に、教育実践への学習者による主観的有効性（4段階リッカート尺度：1=全く有効だと思わない、2=あまり有効だと思わない、3=少し有効だと思う、4=とても有効だと思う）の記述統計を表4に示す。

表3
作成率が高かった上位10のTextとその達成率（2022年度）

Text	作成率 (%)	達成率 (%)
1 Books for Extensive Reading	97.33	99.15
2 SNS (Twitter/Facebook)	85.17	98.34
3 Instructions of package or tag (ex. food, clothes)	84.12	93.72
4 (9) Description of Apps	83.98	89.56
5 (7) English games	73.22	72.11
6 Books (except Extensive Reading)	72.89	71.24
7 Textbook used in class	60.33	53.12
8 English papers related to my field of expertise	59.62	32.76
9 Newspaper (Web)	43.22	20.11
10 Newspaper	37.78	19.13

注) カッコ内の数字は、2019年度～2021年度の作成率の高かった順番である。

表4

教育実践	M	SD	Mdn
a 第1回にて「学生の声」を提示	3.72	0.45	4
b 「Books for Extensive Reading」活動	3.66	0.59	4
c 「Description of Apps」活動	3.58	0.72	4
d 「相互内省段階」の継続的な設定	3.81	0.43	4
e クラスで達成状況・学習方略を共有する活動	3.85	0.36	4

4. 3. Readingに関する「自律的英語学習モデル」

本研究はCOVID-19の影響を受けて遅れが生じた。応用研究（1）は1年半をかけて遂行する

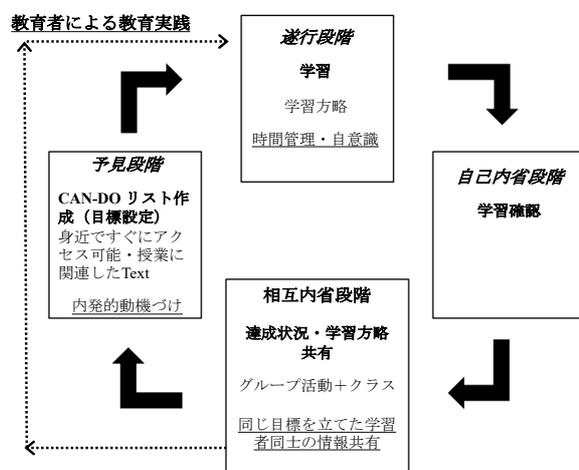
計画であったが、半年しか行っていない。そのため、2023 年度現在も研究は遂行中である。本稿では、本研究結果に基づいて構築した、現段階での、日本人英語学習者（大学1年次生、英語習熟度初級～中級、CEFR A1～A2）における Reading に関する「自律的英語学習モデル」を提案する（図3）。

自己調整学習の4段階における最初の予見段階において、学習者は、表3に示した Text のうち5つを選択し、それに Condition（頻度：Twice or three times a week/once a week/every day・程度：about 75%/100%）と Task（understand/read）を選択して組み合わせることで、Reading に関する5個からなる“ICAN” List を作成した。そのディスクリプタのうち作成率上位7の Text を用いたディスクリプタの達成率は50%を超えた（表3）。したがって、本研究において、作成率上位7の Text を用いたディスクリプタは、自律学習における学習目標として利用可能であると考えられる。上位7の Text は、本研究における対象者にとって身近ですぐにアクセス可能な Text と授業と関連した Text である。一方、達成率が50%を超えなかった下位3の Text は、身近でアクセス可能な Text とは言い難い。

次に、Reading に関する自律学習を促進させる要因、本研究においては CAN-DO リストを実行するための要因の具体例は、表2に示す学習者要因と表4に示す教員による教育実践の5項目が挙げられる。回答率が80%を超えた学習者要因を分析すると、予見段階では、「少し頑張れば達成できそうで意欲がでる（有能感）」「楽しそうな」ディスクリプタの作成、つまり内発的動機づけ（Deci & Ryan, 1985）に関する要因であることが明らかになった。次の遂行段階では、自己調整学習において重要とされる学習方略のうちの、「時間管理」「自意識」（伊藤, 2009）が CAN-DO リストを実行するための要因として挙げられた。そして、相互内省段階では、活動の際は、「異なる目標」より「同じような目標」を立てた学習者同士の情報共有が、自律学習を促進させる要因であることが明らかになった。自己内省段階では、現段階において回答率が50%を超える学習者要因が示されていない。

基礎研究において、自己調整学習における4段階のうち相互内省段階の役割が大きい（上位3項目の回答率が90%を超える）ことが示され（表2）、応用研究では、その相互内省段階から予見段階、そして次の遂行段階にかけての教育者による教育実践が有効であることが明らかになったことから（表4）、大学等の教育施設において、相互段階から遂行段階にかけての教育者による教育実践は、重要な役割を果たすことが示唆された。

図3 Reading に関する「自律的英語学習モデル」



注) 下線は Reading に関する自律学習を促進させる要因を示す。

<引用文献>

Deci, E. L., & Ryan, R. M. (1985). *Intrinsic motivation and self-determination*. Plenum.
 藤田 正 (2010). メタ認知的方略と学習課題先延ばしの行動の関係 教育実践総合センター研究紀要, 第19号, 81-86.
 伊藤 崇達 (2009). 自己調整学習の成立過程：学習方略と動機づけの役割 北大路書房.
 伊藤 崇達・神藤 貴昭 (2003). 自己効力感、不安、自己調整学習方略、学習の持続性に関する因果モデルの検証—認知側面と動機づけ的側面に着目して— 日本教育工学会論文誌, 第27号, 377-385.
 瀬尾 美紀子・植阪 友理・市川 森一 (2008). 学習方略とメタ認知 三宮真智子 (編) メタ認知—学力を支える高次認知機能— (pp. 55-73) 北大路書房
 立田 夏子 (2017). 教養教育英語科目におけるポートフォリオの活用:ヨーロッパ言語ポートフォリオの応用可能性 弘前大学教養教育開発実践ジャーナル, 第1号, 31-41.
 Zimmerman, B. J., & Moylan, A. R. (2009). Self-regulation: where metacognition and motivation intersect. In D. J. Hacker, D. J. Dunlosky, & A. C. Grasser (Eds.), *Handbook of Metacognition in Education* (pp. 299-315). Routledge.

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計5件（うち査読付論文 3件／うち国際共著 0件／うちオープンアクセス 3件）

1. 著者名 立田 夏子	4. 巻 46
2. 論文標題 大学教養教育英語科目における Extensive Reading の有効性 自己調整学習の観点から	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 全国英語教育学会第46回長野研究大会 発表予稿集	6. 最初と最後の頁 392-303
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 立田 夏子	4. 巻 60
2. 論文標題 大学教養教育英語科目における英語ポートフォリオの導入 自己調整学習の観点から	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 The JACET International Convention Proceedings: The JACET 60th Commemorative International Convention (Online, 2021)	6. 最初と最後の頁 182-183
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 立田 夏子	4. 巻 6
2. 論文標題 教養教育英語科目における英語多読図書の読書による効果	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 弘前大学教養養育開発実践ジャーナル	6. 最初と最後の頁 27-37
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 立田 夏子	4. 巻 5
2. 論文標題 ブレンディッド・ラーニングを取り入れた再履修クラスカリキュラムの検証：自己調整学習の観点から	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 弘前大学教養養育開発実践ジャーナル	6. 最初と最後の頁 1, 16
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 立田 夏子	4. 巻 5
2. 論文標題 教養教育英語科目における再履修クラスカリキュラム（～2019年度）	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 弘前大学教養教育開発実践ジャーナル	6. 最初と最後の頁 91, 98
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計7件（うち招待講演 1件/うち国際学会 1件）

1. 発表者名 立田 夏子
2. 発表標題 大学教養教育英語科目における「内なる国際化」 対面授業とオンライン授業
3. 学会等名 日本心理学会第86回大会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 立田 夏子
2. 発表標題 大学教養教育英語科目におけるExtensive Readingの有効性 - 自己調整学習の観点から -
3. 学会等名 全国英語教育学会第46回長野研究大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 立田 夏子
2. 発表標題 大学教養教育英語科目における英語ポートフォリオの導入 自己調整学習の観点から
3. 学会等名 大学英語教育学会60周年記念国際大会（国際学会）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 立田 夏子
2. 発表標題 ブレンディッド・ラーニングを取り入れた大学教養教育英語科目再履修クラスカリキュラムの検証 自己調整学習の観点から
3. 学会等名 日本心理学会第85回大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 立田 夏子
2. 発表標題 再履修科目におけるオンライン教材の活用 弘前大学
3. 学会等名 リアリーイングリッシュ第1回オンラインセミナー（招待講演）
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 立田 夏子
2. 発表標題 大学教養教育英語科目における「世界の多様な英語」への挑戦 - 自己調整学習の観点から -
3. 学会等名 全国英語教育学会第45回弘前研究大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 立田 夏子
2. 発表標題 教養教育英語科目におけるExtensive Readingの取り組み - 大学附属図書館との連携 -
3. 学会等名 第69回東北・北海地区大学等高等・共通教育研究会
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 立田 夏子	4. 発行年 2020年
2. 出版社 金星堂	5. 総ページ数 32
3. 書名 弘前大学 教養教育英語科目 学習ガイドブック	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------